

聖書日課 『からし種』 2025.1.26-2.2

<p>1月26日 (日) ハガイ 2章</p>	<p>「国の民は皆、勇気を出せ、と主は言われる」(4節)、「わたしの霊はお前たちの中にとどまっている。恐れてはならない」(5節)。バビロン帰還後の神殿再建は困難を極め、神殿の基礎が据えられた後も妨害のため二十年も中断されたという。心折れる状況下をハガイは御言葉で励まし続けた。神殿を建てるのは私たちの力ではなく、主ご自身の霊の働きなのだ、と。</p>
<p>27日 (月) ゼカリヤ 1章</p>	<p>「万軍の主はこう言われる。わたしの町々は再び恵みで溢れ／主はシオンを再び慰め／エルサレムを再び選ばれる」(17節)。ゼカリヤはバビロンから帰還し、神殿再建という困難な仕事に取り組む人びとに立てられた預言者。「再び」の恵み、「再び」の慰め、「再び」の選び。神は私たちに「再び」の機会を与えてくださる方。神は今日どんな「再び」を示されるのだろうか。</p>
<p>28日 (火) ゼカリヤ 2章</p>	<p>「わたし自身が町を囲む火の城壁となると／主は言われる」(9節)。70年ぶりに帰還したエルサレムの城壁は瓦礫と化していた。人々は金も武力もなく、周囲の敵からの執拗な妨害に悩まされたという。心折れそうな彼らのために主ご自身が「火の城壁」となってくださった。「火」とは聖霊を意味するのだろうか。今日、私たちを守ってくださる聖霊の働きを感謝して。</p>
<p>29日 (水) ゼカリヤ 3章</p>	<p>「御使いはヨシュアに言った。『わたしはお前の罪を取り去った。晴れ着を着せてもらいなさい』」(4節)。ヨシュアは神殿再建の大切な時期に大祭司として立てられた人物だが、サタンの妨害を受けていたようだ(1節)。ヨシュアが身に着けていた「汚れた衣」(3節)はサタンとの苦闘を意味しているのか。その苦闘を労い、「晴れ着」を用意してくださる主がおられる。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.1.26-2.2

<p>30日 (木)  ゼカリヤ 4章</p>	<p>「これがゼルバベルに向けられた主の言葉である。武力によらず、権力によらず／ただわが霊によって、と万軍の主は言われる」(6節)。ゼルバベルは神殿再建工事を担った技術監督だった。しかし彼の熟練した匠としての技術が神殿を神の宮として建てるのではない。武力や権力によらず、ただ主の霊の働きに依り頼む信仰が神殿の「基」(9節)となる。</p>
<p>31日 (金)  ゼカリヤ 5章</p>	<p>「わたしが再び目を留めて見ると、一つの巻物が飛んでいた」(1節)。ゼカリヤは全地に向かって出ていく巻物(呪い)の幻を語る(3節)。全地を覆う邪悪は「呪い」によって一掃される必要があったからだ。しかしその「呪い」の真意は「正義と真理に基づいて裁き、互いにいたわり合い、憐れみ深く」(7:9)あることを求める神の「激しい熱情」であることを覚えたい。</p>
<p>2月1日 (土)  ゼカリヤ 6章</p>	<p>「万軍の主はこう言われる。見よ、これが『若枝』という名の人である。その足もとから若枝が萌えいでる。彼は主の神殿を建て直す」(12節)。大祭司ヨシュアは「若枝」と呼ばれた。主の若枝は希望の枝、平和の計画。「呪い」を受けた全地から人々が神殿を建てるために集まってくる。どんなに絶望的に思える状況でも、和解と平和の主は希望を示してくださる。</p>
<p>2日 (日)  ゼカリヤ 7章</p>	<p>「果たして、真にわたしのために断食してきたか」(5節)。人々はエルサレムの破壊を覚え断食をし、嘆き悲しんできた。しかし、エルサレムが再建されつつあり、毎年断食の必要性に疑問を感じ神殿にやってきた。神は彼らに言われた。「正義とあわれみの行いをすることが断食よりも重要である。」私たちの礼拝は何を求めているのだろうか。</p>